天満蔵めぐりマップ

写真は天満地区HOPEゾーン協議会発行(2017年3月改訂)の案内、すこし紹介する。

天満のいわれ―大阪天満宮の主祭神である菅原道真公の御神号を「天満大自在天神」といいます。天に満つる無数の星に由来し、これが「天満」の地の名のいわれとなりました。江戸時代には、松平忠明が大坂藩主となり、大坂城の修復と市内の復興につとめ、大坂を「天下の台所」に押し上げました。河川交通が盛んになり、大川沿いの天神橋から天満橋にかけて「天満青物市場」がつくられ、天満は乾物業、酒造業、ガラス工業などで栄えました。また、淀屋橋にかけて百を超える蔵屋敷が建ち並び、「出船千艘、入船千艘」という賑わいでした。今でも菅原町近辺には乾物問屋が残り、「蔵」がその面影を伝えています。

天満・菅原町(乾物問屋)の歴史―承応2年(1653)、天満青物市場が設立されました。最初は乾物品は青物商の店先に青物と一緒に並べられていたと思われますが、次第に独立した乾物専業の店が出来て、青物市場の北側や西の市之側筋(天神橋北詰から難波橋)に乾物問屋街が形成されました。大正年間の資料では、200軒を超える店舗がありました。問屋の事業は、まず売り手、買い手に対してモノの値段を自ら判断して決めて商売をする事ですが、そのほかに運送業、保険業、金融業、倉庫業を兼ねていました。菅原町の乾物問屋は、干瓢、椎茸、乾海苔、凍豆腐、割菜、昆布、寒天などを扱い、全国から商品は集まり、天満を経由して地方に送られて行きました。

天満の蔵の特徴―天満地区には、菅原町を中心に町家・長屋・蔵・塀庭付き戸建て(お屋敷)など、伝統的な建物が多く残っています。蔵を活かしたお店などもあり、まちなみの魅力となっています。天満地区の伝統的建物は明治以降に建てられたものが多く、比較的新しい様式が多いのが特徴です。蔵は、耐火構造をもった木造の倉庫で、一般的な住宅では細長い敷地の奥に立地しますが、卸問屋が多い天満地区では通りに面して立地するものが多いのが特徴です。川に面した平入造の「浜蔵」も見られます。

マップを手に、大阪市役所から菅原町あたりに向った。高速道路の下に蔵を見つけた。マップによると、北村商店の倉庫であり、明治から江戸期の建築。菅原町に残っている蔵の中で一番間口が長く、現在も乾物を扱う現役の蔵である。

市役所から南森町・天満の天神さんに行くことも多く、楽しみが増えた。

(2020年6月24日)